

「ID7 か条」の観点から考察する 『サイバー自習室』の独習支援

Supporting Self Learning in the “Cyber Self-Study Room”:
A Reflection from the Perspective of the ID Seven Principles

高橋 操^{*1}
Misao TAKAHASHI^{*1}

鈴木 克明^{*2}
Katsuaki SUZUKI^{*2}

中野 裕司^{*1}
Hiroshi NAKANO^{*1}

熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻^{*1}
武蔵野大学響学開発センター^{*2}

Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University^{*1}
Center for the Development of Enhanced Learning, Musashino University^{*2}

＜あらまし＞ 「ID7 か条」を考察の枠組みとし、独習支援システム『サイバー自習室』の設計特性とその効果を検討した。学び合う仲間づくりの促進や自己主導学習者の活用を前提とする点に ID 的適合が見られたほか、「ID7 か条」上では不適合となる教師不在の構造も、本システムの機能的特徴と捉えられた。また、教育実践者にとって「ID7 か条」を用いた教育設計の省察は、新たな課題や改善の方向性を見出す手掛かりとなる。

＜キーワード＞ ID7 か条、独習、Co-presence、サイバー自習室

1. はじめに

人生 100 年時代の到来を見据え、生涯にわたり誰もが学び続けられる環境構築が求められており、その一助として、2019 年より『サイバー自習室』の運用・開発に取り組んでいる。

『サイバー自習室』は、世代や社会的背景の異なる多様な独習者が Web 会議ツール上に集い、画面共有されたタイマーの進行に従いながら各自の学習目標に取り組む独習支援システムである。本稿では、鈴木により作成された「ID7 か条（暫定版 2023）」（以下：「ID7 か条」）（鈴木,2023）を考察の枠組みとし、『サイバー自習室』が持つ独習支援機能の特性およびその効果について論じる。

2. 独習支援システム『サイバー自習室』

『サイバー自習室』では、独習者が独習を始めたときに、自ら開室主催者となって SNS（Slack）を通じて学習仲間を募る仕組みとなっている（図 1）。集まった独習者は Web 会議ツールにログインし、画面共有されたタイマーに従い学習を進める。タイマーは「55 分の独習」と「5 分の休憩」からなる 1 セットを繰り返し表示。入退室自由。『サイバー自習室』の中心となる仕組みは、このタイマーによる学習時間の同期に加え（高橋,中野 2025a）、他の独習者が学んでいる様子を WEB カメラ越しに確認することや休憩中の交流などを通じ、互いの存在を意識しながら学習する「Co-



図1 『サイバー自習室』入室から退室まで

presence（共在感）」（高橋,中野 2025b）を生み出す点に特徴がある。

3. 「ID7 か条」の観点より考察

表1の通り、「ID7 か条」の各条項（上段）に基づき『サイバー自習室』の支援機能を考察し（下段）、各条項への適用度合（◎：非常に適合 ○：適合 △：限定的に適合 ×：適合せず）をあわせて示した。

表1 「ID7 か条」を枠組みとした考察

＜第1条＞ 自分が受けたくない教育は提供しない。ダメな教育を再生産してはダメ。

... ○

- 『サイバー自習室』は、開発者である筆者の学習経験に基づくニーズから生まれた。
- 学習者として抱えていた「やる気が出ない」「集中できない」「一緒に勉強する仲間がほしい」といった悩みを教育設計者として解決しようと模索した結果、『サイバー自習室』を開発した。

＜第 2 条＞ 金太郎飴(SRL)の製造で終わらない。 「自分なり」を少しずつ加えて自己調整学 習 (SRL) か ら自己主導学習 (SDL) へ進歩させる。

… △

- ・ 独習者は、学習目標の設定、教材選択、進行管理を自己責任で進める必要があり、自己主導学習者であることが前提となっている。
- ・ 一方、タイマーによる独習開始・終了時間が予め決まっている点、画面共有されたタイマーに従い同ペースで独習する点は、自己調整学習の支援ツールとして機能している。
- ・ 従って、一部、適合していると考えられる。

＜第 3 条＞ 覚えさせるのではなく記憶に残る教育を。 挑戦的企てで構成し、忘れられない出会いの出現度 を高める（学習経験の質モデル）。

… ×

- ・ 『サイバー自習室』は、個々の独習内容には関与せず、積極的に関わる構造ではない教師不在の仕組みである（高橋、中野 2025b）。そのため、第 3 条は適合しない。

＜第 4 条＞ 学ぶ楽しさを実感できることを目指す。学 ぶとは本来、楽しいことだから、自分の成長を実感でき ると「動機づけ」は不要になるから。

… ○

- ・ 『サイバー自習室』に独習者は喜んでやってくる
- ・ そこには、共に学び合い、互いに成長を支え合う「コミュニティ」がある。
- ・ 楽しい雰囲気があるため、特別な動機付けは必要ない

＜第 5 条＞ 学び合う仲間づくりにつながる方法を選 ぶ。互いに学び合うことができれば、より遠くまで行ける から。

… ◎

- ・ 『サイバー自習室』には、「学び合う仲間づくり」を促進する以下の仕組みが設計されている（図 2 参照）。

★タイマーを画面共有し、学習ペースを同期させながら
進行

★1 時間ごとに 5 分間の休憩を設定。学習内容や進捗状況
の情報交換が行われ、相互に目標達成を応援し合う働
きかけがある

★Web カメラ越しに他の学習者の学ぶ姿を確認すること
で学習意欲が促進される効果が確認されている

★閉室時間になっても「もう 1 セット頑張ろう」と
励まし合う場面も。

- ・ Slack を活用した入室以外の交流もある。

「サイバー自習室」は・・・

ツーリングに似ている



図 2 『サイバー自習室』紹介スライド (2022) より

＜第 6 条＞ 成長を確認し味わいながら一歩ずつ進 む方法を教える。失敗から学ぶ術、それが評価。達 成を味わう、それも評価。

… ○

- ・ 55 分の独習時間と 5 分の休憩時間の 1 セットを繰り返す中で、独習者は各自の学習目標を達成し、自身の成長を感じることができる。
- ・ また、『サイバー自習室』WEB アプリには、各自の独習時間の集積や、いつどのようなタスクに取り組んだかを記録できる機能も備えることから、自分がやってきた独習の軌跡を振り返ることが可能。
- ・ 1 セットの独習は小さな一歩だが、「失敗しながら」も、それを積み重ねることで、「成長を確認」し「達成感を味わう」ことができる。

＜第 7 条＞ 自分の得意を伸ばし、もっと役に立 てる人になることを目指してもらおう。それが生き甲斐 になるから（アドラー心理学）。

… ○

- ・ 『サイバー自習室』の独習者は、「やるべきこと、やりたいことがある」から独習している。
- ・ 「自分のやりたいことを見つけて、それで社会に貢献したい」とする自己主導学習者である。
- ・ 即ち第 7 条の要素を備えた学習者が参加している

4. まとめ

『サイバー自習室』の独習支援を「ID7 か条」に照らした結果、学び合う仲間づくりの促進や自己主導学習者が活用といった点で、総じて ID 上の適合があると考察できた。また、本システムは教師不在であり、学習者が目標や教材を自ら選び管理する自己主導学習者の活用を前提とするため、第 5 条には適合しないが、敢えてその役割を担わない方針を今後も維持することが、本システムの特徴に繋がると考える。そして、多くの教育実践者にとって、「ID7 か条」を用いた教育設計の省察は、現時点の有用性を認識するとともに課題や改善の方向性を見出す手がかりとなると感じた。

参考文献

- 鈴木克明 (2023) 【連載】ヒゲ講師の ID 活動日誌：受け継いでほしい思い：ID を考える前提と ID7 か条、ID マガジン Vol.122 <https://idportal.gsis.jp/mail-magazine/1191.html> (参照日 2025.06.24)
- 高橋操, 中野裕司 (2025a) 「PomodoroTechnique」に関する研究紹介と『サイバー自習室』におけるその役割, 2025 年春季全国大会 (第 46 回), 701-702
- 高橋操, 中野裕司 (2025b) 『サイバー自習室』における「Co-presence」の検討. JSISE2024 第 5 回研究会, 68-73